金子洋之『ダメットにたどりつくまで：反実在論とは何か』への批判 *

山田 竹志 †

金子洋之『ダメットにたどりつくまで：反実在論とは何か』（2006；以下『たどりつくまで』と略し，ページ番号のみを記した参照はすべて同書への参照を示す）は，マイケル・ダメットの思想についての日本語では初の，そして刊行から 10 年ほど経った現在でもなお唯一の解説書である．しかし，体裁上はあくまで解説書であるとはいえ，ダメットに対して共感的な立場から，これほど包括的な擁護が展開されるのは稀なことであり，また著者オリジナルの洞察も随所に盛り込まれているため，本書には研究書としての意味合いも少なくない．本稿では，『たどりつくまで』のダメット解釈についてやや詳しく検討を加えたい．

このような検討の意義は自明ではない．英米哲学において，ダメットの仕事，特に『たどりつくまで』が取り上げている，二値原理（明確な意味を持つあらゆる言明は真偽が確定している，という原理）に対するダメットの批判は，1970 年代後半から 1980 年代にかけて盛んに議論されたが，その後は急速に廃れ，現在では真剣な関心を向けられることさえ稀である．廃れた原因の一つは，ダメットの著作の難解さにあるだろう．しかしそれ以上に，特に英米哲学においては，二値原理は妥当ではないという，ダメットの改訂主義的論点そのものを真剣に引き受けることが難しいのではないかと思われる．実際，こうした改訂主義を受け入れることが破滅的であるという趣旨のコメントは，英米の特に論理学・数学の哲学の文献でしばしば見かける．

そこで，ダメットについての議論の多くは二種類に分かれる．第一に，ダメットが改訂主義的結論に導かれたのは，彼が何か特殊な前提（例えば基礎づけ主義，行動主義など）を置いていたからであって，われわれはそうした前提を受け入れる必要はなく，従ってダメットの議論を顧慮する必要もない，という反応である．ダメットを批判する論者は概ねそのように論じる．第二に，改訂主義の是非に触れることなく，ダメットから有益な論点を取り出そうとする議論である．1990 年代以降，ダメットに対して多少とも好意的な論者は，このように論じることが多い．

これに対し，『たどりつくまで』の目的は，ダメットの改訂主義的議論が，ダメットに基礎づけ主義を帰することなく理解可能であって，それゆえ真剣な考慮に値する，と論じることにあり，上記のような典型的な議論とは一線を画している．このような立場を擁護することはもちろん，これまでの経緯から見てそう簡単ではないと思われるが，私自身は，このような立場にも依然見込みはあり，それゆえ『たどりつくまで』の議論を検討する意義は失せていないと考える．

では，ここで『たどりつくまで』の構成をまとめつつ，本稿で何を論じるかを手短に述べよう．『たどりつくまで』は 5 つの章から構成されているが，最初の 2 つの章はダメットの二値原理批判・古典論理批判に影響を与えた思想家たち，すなわちフレーゲ（第 1 章）と直観主義者たち（第 2 章）の紹介という位置づけであり，

---

* 出典：『科学基礎論研究』第 43 巻第 1&2 号（2016 年），pp. 37–48．(c) 科学基礎論学会

† 東京大学 大学総合教育研究センター ymdtksh@sk9.so-net.ne.jp 草稿に対し有益なコメントを頂いた岡本賢吾，片岡雅知，菊池誠，黒川英徳，坂本邦暢，次田瞬の各氏に謝意を表します．

第 3 章以降が同書の本体を成す[*1]．まず第 3 章では，クワインやデイヴィドソンの全体論的言語観に対するダメットの批判と，ダメット自身の立場である「分子論的言語観（molecular view of language）」が説明され，この言語観の下で論理の改訂がどのように捉えられるかが論じられる．

第 4 章の主たるテーマは，二値原理を拒否するためのダメットの議論として知られている「表出論証（manifestation argument）」の提示と，これらに対して他の論者から提起された批判のいくつかに対する応答である[*2]．他の論者からの批判を検討する中で，意味理解の「表出（manifestation）」[*3]という概念についての「標準解釈」が取り出され，この「標準解釈」に対して，第 3 章で取り出された分子論的言語観を参照しつつ批判がなされる．本稿 §1 では，この議論を手短にまとめつつ，重要なのはこの「標準解釈」批判の議論ではなく第 5 章の議論であると論じる．

第 5 章では，タルスキ的な真理理論が意味理論に転用できるという，デイヴィドソンのよく知られたアイデアに対するダメットの批判と，その中で提起された「徹底性の要求（full-bloodedness requirement）」が説明され，これを満たす意味理論とはどのようなものなのかが考察される．この考察を通じて，意味理解の表出とは何かという問いにも答えが与えられる．この議論を本稿 §2 でまとめる．私はこの議論にダメット解釈として問題があると考えるが，その問題点はかなり事情に通じていないと指摘の難しい込み入ったものなので，本稿 §§3, 4 でやや詳しく検討する．

私の指摘したい問題点は大きく分けて二点ある．第一に，『たどりつくまで』においては，徹底性の要求を立てる眼目が「言語と世界の接続」の説明を与えることにある，と考えられているが，この考えはダメットの改訂主義を支えるためには不十分だ，ということである．この批判の背後にある私の考えは，改訂主義は，意味に関する通常の考察において当たり前に議論され，かつしばしば支持されるような論点の検討を通じて動機づけられ，支えられるべきだ，というものである．この点について，本稿 §3 で述べる．

第二に，『たどりつくまで』は「意味理論の第二の局面」という概念を導入しているのだが，この「第二の局面」という概念の内に本来区別すべき複数の概念をまとめてしまったために，改訂主義的議論の構造が見失われている，ということである．しかし，この「第二の局面」の概念は，従来極めて難解だとされてきたダメットの論文「意味理論とは何か？(I)」（Dummett 1975）に対する『たどりつくまで』の解釈の鍵となる概念である．そして『たどりつくまで』は，このダメットの論文に対する数少ない理解可能な解釈を与えているので，これを単に不十分だと退けて終わらせてしまうわけにはゆかない．そこで本稿 §4 では，代替案となる私の解釈をやや詳しく述べつつ，『たどりつくまで』がどの点で不十分なのかを述べ，意味に関する通常の考察に基いて改訂主義を支える可能性を示唆する．

今のまとめから分かる通り，私はこれから，『たどりつくまで』の中心的な議論は不十分であると論じる．しかし本書の中心的論点，すなわち，ダメットの改訂主義的議論が，ダメットに基礎づけ主義を帰することなく理解可能であり，それゆえ改訂主義的主張は真剣な考慮に値するという論点については，私は共感を持つ．そこで，この論点をよりよく支持する道を探ることが重要であると私は考える．

[*1] 付言すれば，『たどりつくまで』の中で最も完成度が高く啓発的なのは，第 2 章におけるブラウワーに関する説明と直観主義論理の形成に関する説明であると思われるが，同書全体の議論にとってはそれほど重要ではないので，本稿では扱わない．

[*2] 二値原理批判のためのもう一つの議論である「習得論証（acquisition argument）」についても興味深い議論があるが，本稿では扱わない．

[*3] 本稿では『たどりつくまで』にならって，「manifestation」を「表出」と訳す．しかし，「表出」という語には自然に出てきたものというニュアンスがあるのに対し，ダメットにおける「manifest」には意図的行為というニュアンスが強いように思われるので，私としては「顕示」と訳したいと考えている．

1　表出の要求と標準解釈

最初に表出論証について，『たどりつくまで』第 4 章を手がかりに大まかに確認しよう．表出論証とは，二値原理を拒否するダメットの議論の中核をなすとみなされてきた論証である．この論証は「表出の要求（manifestation requirement）」と呼ばれる次の要請を出発点とする：「ある人がある文の意味を知るとき，その知識は，その人がその文を使用する，その使用において，「表出 manifest」されなくてはならない」（p. 138）．ここで「意味の知識が文の使用において表出される」とは，ある文の意味の知識・意味理解をある人に帰属させることへの正当化が，その人によるその文の使用において与えられる，といったことを指し（例えば pp. 130, 141, 143 を参照），また「表出」とは，そのような正当化を与える使用，振る舞いのことを指す（例えば pp. 190, 193 を参照）とされる．

表出論証の概略はこうである．いま，算術文の意味理解とはその真理条件の知識を持つことだと仮定してみよう．すると表出の要求により，われわれはこの真理条件の知識の表出を探し求めなければならない．しかし，算術文の内には「実効的に決定可能」ではない文が含まれており，そうした文に関しては，真理条件が本当に成立しているかどうかということと，われわれがそれを認識できるかどうかということとの間にギャップが生じる（p. 145）．それゆえ，このような文に関して，真理条件の知識は使用において表出されえない，と論じられる．従って，真理条件の知識を意味理解と同一視すると，算術文に関して表出の要求は満たされない，と言えるので，この同一視が成り立つような仕方で算術文を理解することは不可能だと結論づけられる．

この結論からどうやって二値原理の拒否が導かれるのか，というのは，『たどりつくまで』が明確に書いていない点であり，一般にもあまり理解されていないと思われる点である．ここでは私自身の考えで補っておく．まず二値原理が正しい，すなわち，明確な意味を持つ算術文の真偽がすべて確定しているとすれば，そうした算術文の真理条件もすべて確定していることになるだろう．ここで（やや恣意的に見えるかもしれないが）次の原理を立てよう：

(*) もし文の真理条件が確定しているならば，その文の意味理解はその真理条件の知識と同一視されねばならない．

この原理（*）と前段落の議論を合わせると，算術文の意味理解はその真理条件の知識と同一視できないので，算術文の真理条件は確定しているとはみなせない，従って二値原理も算術文に関して妥当ではない，と結論づけられる．私としては，これがダメット自身の念頭に置いていた議論であり，かつこの議論は正しいと考えているが，この点は別の機会に論じたい[*4]．

表出論証は多くの論者からの批判を受けてきた．そうした（特に 1980 年代までの）批判者たちが主に注目してきたのは，「実効的に決定可能でない文に関しては，真理条件の知識は使用において表出されえない」というダメットの主張である．この主張が正しいかどうかは，どのような振る舞いが「意味理解の表出」をなすと認められるかに依存するだろう．ここで批判者たちは，ダメットがこのように主張したのは，彼が意味理解の表出となりうる振る舞いの範囲を過度に狭く制限したためだ，と考えてきた．すなわち批判者たちに従えば，ダメットにおける表出の要求は，「認識論的な制約」（p. 166），つまり，他者の意味理解という直接には知りえないものについての知識を，意味理解の帰属に先立って確実に見出せるような行動上の証拠によって基礎

[*4] 一言だけ付け加えると，この原理（*）は，「意義は指示を決定する」という，ダメットのフレーゲ解釈の根本をなす原理からの帰結であると私は考える．

づけよう，という動機に基づいて立てられた制約であるとされる．それゆえダメットにおいて，真理条件の知識の表出とは「該当する文の真理ないし虚偽の承認として解釈されるふるまい，あるいは，それらへの同意・不同意という行動主義的な傾向性」（p. 163）でなければならなかったのだとされる．

表出の要求は認識論的基礎づけ主義に基づく制約であり，意味理解の表出はこのような「行動主義的傾向性」でなければならない，とするこの解釈を，『たどりつくまで』は（Shieh 1998 にならって）表出についての「標準解釈」と呼ぶ（pp. 163, 165）．標準解釈を採る論者たちは，表出の要求を導く認識論的な基礎づけ主義を受け入れる必要はなく，それゆえ，意味理解の表出となりうる振る舞いの範囲をダメットのように制限する必要はない，あるいは，そもそも意味理解の表出を問題にする必要はない，などと論じるのである．

ここで予め言っておくと，私自身は標準解釈に基づくこのような議論を受け入れない．後で見るように（§4.4），私は表出の要求が，意味理解に関する比較的穏健な前提（後述の前提（a, c））のみから導かれると考えており，それゆえ，表出論証はわれわれにとって真剣な考慮に値すると考えている．

『たどりつくまで』もまた，この標準解釈が「かなりあやしい」「ダメットの主張とかけ離れている」（p.165）と述べている．しかも単にそのように述べるだけでなく，『たどりつくまで』第 3 章で説明されたダメットの分子論的言語観を引き合いに出して，標準解釈がどの点で誤っているのかを議論している．すなわち『たどりつくまで』は，この言語観において，われわれの言語実践が「つねに正当化の要求にさらされている」（pp. 170–1）ものとして描き出されることに触れつつ，次のように述べている（p. 171）：

> ダメットの「使用」や「実践」は，正当化や理由づけといったダイナミックなプロセスを含んだ「使用」であり，「実践」なのである．それゆえ，ダメットの言う「表出」は，そうしたダイナミックな言語実践の中での表出でなくてはならない．標準解釈とは違って，ダメット自身の考える「表出の要求」は，正当化のプロセスを含むようなより包括的な「使用」概念のもとで捉えられなければならない．

この一節は印象的である．しかし，これを含めた前後の論述を見ても，「正当化のプロセスを含む」ような使用概念を採用するとはどういうことなのかははっきりしないし，またこのような使用概念の採用がどう標準解釈と食い違うのかもはっきりしない．それゆえ私には，『たどりつくまで』の標準解釈批判がどんな議論を提示しているのか分からない．

しかし，そもそもこのように標準解釈を直接批判する議論を提示することは，それほど重要ではない．というのも，ダメットの表出の要求に対して，基礎づけ主義に基づかない正当化が与えられさえすれば，標準解釈を根拠にしたダメット批判は無効になるし，また標準解釈そのものにそれほど重要な洞察があるようには思われないからである．重要なのはむしろ，『たどりつくまで』が表出の要求に対してどのような正当化を与えているかである．そこで以下では『たどりつくまで』第 5 章で述べられたその正当化について検討する．

2　『たどりつくまで』第 5 章

「つつましい（modest）」意味理論と「徹底した（full-blooded）」意味理論という対概念は，ダメットの読者の多くを戸惑わせてきた．ダメットの説明を素直に読むと，徹底した意味理論とは「新たな概念をあらかじめもっていない人にそれらの概念を説明するのに役立つ」意味理論だ，という特徴づけが出てくるように見える．しかし，意味理論というのも言葉で述べられた理論である以上，何らかの概念を利用せざるを得ない（それどころか通常は，当の言語の話者なら誰でも知っているとは言いがたいような，数学的概念さえ利用している）．そうすると，意味理論に完全な徹底性を要求するというのは，そもそも充足不可能な要求であるように

見える[*5]．『たどりつくまで』第 5 章で試みられるのは，この徹底性の要求について，合理的な解釈と正当化を与えることである．それを通じて表出の要求に対する正当化も試みられている．本節では徹底性の要求について『たどりつくまで』の解釈をまとめる．

『たどりつくまで』はまず，「意味内容の特定」と「意味の知識を持つとはどういうことかの特定」という，意味理論の「二つの局面」の間の区別をダメットから読み取る（pp. 188–90）．第一の局面である「意味内容の特定」は，「真理理論の真理条件的意味理論への転用」によっても十分に行える（pp. 192, 201）ようなタスクの遂行であり，おそらく「文 s が真であるのは p ときかつそのときに限る」や「表現 t は x を指示する」といった規定を与えることが念頭に置かれている．これに対して，第二の局面である「意味の知識を持つということがどういうことかの特定」は，ダメットの意味理論に特有のタスクである．これはさらに「何が意味理解の表出とみなされるかの特定」（pp. 189–90），「何をもって意味の帰属の正当化とみなされるかの特定」（ibid.），「意味内容の把握が何に存するかの特定」（p. 193），「概念の把握が何に存するかを説明する」（p. 215）などと言い換えられている．

『たどりつくまで』はこの枠組みを用いて，ダメットによる徹底性の要求とは，結局のところ，「意味理論は，言明や概念の意味内容を特定するだけでなく，その内容を把握することが何に存するかを表示しなければならない」（p. 215）という要求，すなわち，意味理論は第一の局面だけでなく第二の局面も持たねばならない，という要求であると言う．つまり，徹底性の要求の本質は，新たな概念獲得に役立つべしと要求する点にはなかったのであり，「われわれとしてはここで，「概念の把握が何に存するかを説明する」ということがいかなることなのかを解明するという一点に焦点を絞ってよい」（ibid.）とされる．

『たどりつくまで』は，〈概念の把握が何に存するか〉を説明せよという要求を立てる目的が，「言語と世界がいかに接続されるか」を「表象システムの内部において説明する」ことにある，と論じている．このような定式化がダメット自身によって述べられているわけではないが，『たどりつくまで』はダメットの挙げた徹底した意味理論の例とつつましい意味理論の例を比較することで，この結論を導き出している．しかしここでは，議論の結論を説明している箇所のみ見ておく．

『たどりつくまで』によれば，意味理論は，何らかの表象システムの内部で言語と世界の関係を説明する，という困難だが不可欠な課題を遂行しなければならない（p. 216）：

> 意味理論が言語と言語の外とを接続しなければならないということは，あるいみで明らかである．言語と言語の間をただ循環するだけというような意味理論は，その名に値しないであろう．けれども，その一方で，いかなる表象システムをも離れた地点で，言語と世界の関係を説明したり論じたりできない，ということもたしかである．いったい，このあたりの事情はどのように考えればよいのだろうか．

徹底した意味理論は，この課題を遂行するために要請されたものだとされる．すなわち，「まっとうに言語を使えている人は，言語外のものとのリンクをちゃんとつけている」のだから，「言語と言語の外を直接つなぐのではなく，間に言語を使える人を介在させて，その人が言語をちゃんと使えるということがどういうことかを説明」すること，とりわけ「当のリンクの存在を前提にするような」事実に訴えずにそれを説明することによって，言語と世界の接続を説明できるのではないか（p. 217）．これがダメットのアイデアだとされる．

以上の考えをより具体的に説明するために，次の二つの説明が対比される（pp. 217–8）[*6]：

[*5] こうした疑いを述べたものとして，McDowell 1987, §1 を参照．『たどりつくまで』pp. 209–10 も参照．

[*6] ここでは（A）と形式を合わせるために，（B）の言い回しを『たどりつくまで』のものから若干変えてある．なお，『たどりつくまで』においてこの（A）と（B）の対比による説明へと至る議論は，マクダウェルのダメット解釈に対する批判として書かれているが，実は（ややこしいことに）この（A）と（B）の対比による説明自体がマクダウェルに由来する（McDowell 1987, §3; 1981,

(A)「赤い」を理解するために，話者は，「赤い」が赤い対象に，そしてそれらのみに適用されるということを知らなければならない．

(B)「赤い」を理解するために，話者は，適切な条件のもとで，指示された対象が赤いか赤くないかに応じて，「これは赤い」を受け入れたり，拒否したりできなければならない．

このいずれも，〈ある人が「赤い」という表現を正しく使えるとはどういうことか〉についての説明になっていると言えそうだが，タイプ（A）の説明の説明項においては，知識内容を表す従属節（英語の場合で言うと that 節）の中で「赤い」という表現が使用されているのに対して，タイプ（B）の説明においてはそのようなことは生じていない．このタイプ（B）の説明こそが，言語と言語の外との「リンクの存在を前提」しない説明なのである[*7]．

以上の『たどりつくまで』の議論は，ダメット特有の，解釈の難しい概念について，興味深くかつ体系的な解釈を与えることに成功しているように見える．私としても，徹底性の要求のポイントが，意味理論は新たな概念獲得に役立つべしと要求する点にはない，という論点には同意できるし，タイプ（B）の説明が徹底した意味理論の例を与えている，という点にも同意できる．しかし問題は，ダメットの改訂主義をどう擁護できるかである．この観点から『たどりつくまで』第 5 章を見ると，改訂主義を擁護する議論としても，ダメット解釈としても不十分なところが見えてくる．以下このことを論じる．

3　改訂主義は擁護できたか

本節では，『たどりつくまで』第 5 章の議論と表出の要求の関係を述べ，この議論が改訂主義の擁護として不十分であることを示す．最初に，論点をより明確にするために，『たどりつくまで』第 5 章の議論の利点をもう一度確認しよう．ダメットの議論において多くの人を戸惑わせたのは，意味理論に完全な徹底性を要求するということが，そもそも充足不可能な要求であるように見える，という点であった．これに対し，『たどりつくまで』の議論は，徹底性の要求を満たすような意味理論が少なくとも可能だ，という考えに一定の蓋然性を与えることに成功しているように思われる．これが『たどりつくまで』の議論の利点であることは疑いない．

しかし『たどりつくまで』によれば，徹底性の要求は表出の要求と「完全に一体」（p. 209）のものである．つまり，意味理論の第二の局面は「何が意味理解の表出とみなされるかの特定」とも言い換えられるので，「意味理解は使用において表出可能でなければならない」という表出の要求は，「第二の局面を遂行するような意味理論を与えることが可能でなければならない」ないし「徹底した意味理論を与えることが可能でなければならない」という要求として言い換えられる．

すると，改訂主義的結論を導くためには，第二の局面を遂行する意味理論の実例を与えることで，「意味理論が第二の局面を遂行することが可能だ」と論じるだけでは不十分だということになる．改訂主義的結論を導くために必要なのは，「第二の局面を遂行する意味理論を与えることが可能でなければならない」という表出の要求を正当化することなのである．

では，先ほど述べた『たどりつくまで』のアイデア，すなわち，第二の局面の遂行の目的が「言語と世界の

p. 324）．つまり，マクダウェルのダメット批判は，このようにダメットの考えを定式化した上でなされているのである．従って，『たどりつくまで』のマクダウェル批判の議論がマクダウェル批判として機能しているとは思えない．ただ誤解を防ぐために言っておくと，私はここで，『たどりつくまで』がマクダウェル批判をしていないと言っているだけであり，マクダウェルのダメット批判が正しいとは私は考えない．

[*7] なお，このタイプ（B）の説明においては，対象が赤いか赤くないかが実効的に決定可能であることが前提されている．というのも，赤いか赤くないかが実効的に決定可能でないとすれば，われわれに「赤いか赤くないかに応じて，「これは赤い」を受け入れたり，拒否したり」する能力を帰属させることはできないからである．

接続」を「表象システムの内部で」説明することにある，という考えを使って，表出の要求を正当化できるだろうか．ここで，先に §2 に挙げた引用において，この種の「説明」を与えるという課題がわれわれにとって不可欠であり，かつ困難な課題であることが強調されていたことを思い出そう．第二の局面の遂行によってこの課題が果たされ，かつ他にこの課題を果たす道がないとしたら，第二の局面の遂行可能性は必然的だと言えるのではないか．つまり：

(1) われわれには「言語と世界の接続についての表象システム内部での説明」を与えることができなければならない，
(2)「言語と世界の接続についての表象システム内部での説明」を与えることは，第二の局面の遂行以外の仕方では不可能である，
(3) ゆえに第二の局面を遂行する意味理論を与えることができなければならない．

これが『たどりつくまで』において考えられている表出の要求の正当化であろう．

ここで，この前提（1）の必然性や前提（2）の不可能性が成り立つかどうかは，最終的には，与えられた意味理論が「言語と世界の接続についての表象システム内部での説明」として認められるための規準に依存すると思われる．しかし，『たどりつくまで』はこの種の説明の実例を与えているに過ぎず，この種の説明として認められるための規準は明らかにしていない．そして，そもそも「言語と世界の接続」や「表象システム内部での説明」といった，ダメット自身が用いておらず，一般にも十分に確立された用法を持つとは言い難い概念が，前提（1）や前提（2）を支えるに足るほど明確な適用規準を持ちうるのかは明らかでない．そうだとすれば，『たどりつくまで』の議論そのものは，前提（1）や前提（2）を十分支えることができておらず，それゆえ結論（3）を支持する力を持たないし，実践の改訂を促す力も持たないのではないか．

誤解を避けるために言っておくと，私は改訂主義的結論そのものに反対しているわけではない．私が言いたいのは，改訂主義的結論を，ダメット自身が用いておらず，一般にも十分に確立された用法を持つとは言い難い概念を用いて擁護するのは難しいのではないか，むしろ改訂主義者は，意味に関する通常の考察において当たり前に議論され，かつしばしば支持されるような点を争点とすべきではないか，ということである．そしてもちろん私は，ダメット自身の議論はそうなっていると言いたいのである．

このようにダメットを理解しようとする場合，『たどりつくまで』第 5 章の枠組みにおいて修正すべき点として，次の点を指摘できる．すなわち『たどりつくまで』は，ダメットにおいて区別されていたいくつかの概念を「第二の局面」という言葉でまとめてしまい，それらの概念の論理的な関係を問わなかった．それによって，改訂主義的結論を擁護する上での本当の争点が見逃されてしまったと私は考える．この点を次節で説明する．

4　第二の局面とは何か

『たどりつくまで』において，徹底した意味理論とは「第二の局面」を遂行する意味理論だとされていた．しかし，「第二の局面」の遂行には三つの異なった課題の遂行が含まれていると言える．すなわち，『たどりつくまで』が「第二の局面」の記述とみなしたダメットの言い回しは，次の三種類に区別できる：

(i) 意味の知識を持つということがどういうことかを特定する[*8]（pp. 189–90）．

[*8] 以下では「意味の知識を持つ」と「意味理解を持つ（意味を理解する）」は区別せずに用いる．これらはダメットにおいても『たどりつくまで』においても区別されていないと思われる．

(ii) 意味内容の把握が何に存するかを特定する（p. 193），概念の把握が何に存するかを説明する（p. 215）．
(iii) 何が意味理解の表出とみなされるかを特定する（p. 190）．

これらの違いは一見分かりにくいかもしれないので，予備的な説明を加えておこう．まず，課題（iii）の「意味理解の表出を特定する」とは，§1 で見た通り，ある表現の理解を誰かに帰属させることへの正当化を与えるような，その表現の使用のあり方を特定することである．もしそのような使用のあり方を特定できれば，その表現を理解するとはその表現をその特定された仕方で使用できることだという説明によって，課題（i）が遂行されるだろう．すなわち課題（iii）の遂行は課題（i）の遂行を伴う．しかしある表現を理解するということが，常にこのような形で，その表現をある仕方で使用できることとして説明されるべきかどうか，すなわち課題（i）の遂行が課題（iii）の遂行を伴うかどうかは，議論を要する事柄である．

課題（i, ii）の違いは例で示そう．課題（i）は例えば〈「地球は動く」という文の意味の知識について説明する〉ということであるのに対し，課題（ii）は例えば〈地球が動くという内容の把握について説明する〉ことである．すなわち，課題（i）において説明を与えられるのは，〈ある主体がある言語表現を理解する〉という，ある主体とある言語表現の関係であるのに対し，課題（ii）において説明を与えられるのは，〈ある主体がある内容の考えを持つ〉という，少なくとも表面上は言語表現に関わらない事態である[*9]．（ただし，〈ある内容の考えを持つ〉ことが結局は〈何らかの言語表現の理解〉に帰着する，という考え方があり，「思想に対する言語の先行性」としてこの後登場する．）

ここで，表出論証に直接関係するのは課題（iii）であり，しかも文の理解に関してのみ課題（iii）を考察すればよい．というのもまず，表出論証において表出の要求が使われるのはどこだったかを思い出せば，「算術文の真理条件の知識は表出されえない」という観察から，「算術文の真理条件の知識を算術文の意味理解と同一視することはできない」と結論づけるステップであるから，表出の要求は，表現一般ではなく，文の理解についてのみ正当化されればよい[*10]．そして，文の理解について表出の要求を立てるということは，文の理解の表出を特定する意味理論，すなわち文の理解について課題（iii）を遂行する意味理論が構成可能でなければならない，という要求を立てることにほかならない．

従って，ダメットの表出論証を検討するために必要なのは，まず文の理解に関して課題（iii）の遂行を要求することがどう正当化されるのか，そしてこの課題（iii）と，課題（i, ii）の関係はどうなっているのかを明らかにすることだ，と言える．

さて，ここで課題（i, ii, iii）の正当化や相互関係を論じることは，私自身のダメット解釈について少々紙幅を割いて説明することを必要とするので，『たどりつくまで』の論評という本稿の趣旨からはやや外れることになる．しかし，ここで問題となるダメットの論述は，極めて難解とされる論文「意味理論とは何か？(I)」（1975；以下 WTMI と略す）のそれである．『たどりつくまで』第 5 章はこの論文に対する数少ない理解可能な解釈を与えているので，『たどりつくまで』第 5 章の解釈が不十分だと主張するならば，それ以外の解釈が少なくとも可能だと示すことが当然求められるだろう．そこで以下では，WTMI の議論に対する私の解釈をやや詳しく説明しつつ，課題（i, ii, iii）について議論することにしたい．

[*9] なお，「表現 E の表す内容を把握する」という形の言い回しは，「表現 E がどの内容を表しているかを把握する」＝「表現 E の意味を知っている」という意味にも取れるし，「表現 E が表している内容について，その内容を把握する」という意味にも取れるが，本稿では専ら後者の仕方で，つまり課題（ii）の説明の対象を表すものとして用いる．これはダメットの用語法にも合っていると思われる．また，このダメットの用語法が見逃されたために，哲学者の間に多くの混乱が生じていると私には思われる．

[*10] 実際，語の理解に関しては，文の理解を説明するための仮説として扱ってよく，表出の要求は課せられていない（例えば Dummett 1976, pp. 37–8 を参照）．これは通常の意味論研究の実践とも一致する．

以下ではまず，課題（i）から課題（ii）を導く議論を与え，これが実は「意味理論はつつましくあってはならず，徹底したものでなければならない」という WTMI の論点（徹底性の要求）と同じものであることを示す（§§4.1, 4.2）．その上で，『たどりつくまで』の解釈がどういう点で不十分かを述べる（§4.3）．次に，課題（iii）の正当化と課題（i, ii）との関係を述べ（§4.4），最後に，改訂主義にとって以上の議論が持つ意味合いを述べる（§4.5）．

表出論証にとって重要なのは課題（iii）であることを考えれば，課題（i）から課題（ii）の導出に紙幅を費やすのは奇妙に思われるかもしれない．しかし，表出の要求と課題（i, ii）には関連があり，またこの課題（i）から課題（ii）の導出に関する誤解が表出の要求に対する理解を妨げている面があるので，この導出に関して適切に理解しておくことはわれわれにとっても必須である．

4.1　つつましい意味理論批判

先ほど見た通り，課題（i）は例えば〈「地球は動く」という文の意味の知識について説明する〉ということであるのに対し，課題（ii）は例えば〈地球が動くという内容の把握について説明する〉ことである．さてここで，〈「地球は動く」という文を理解する〉ことは，〈地球が動くとはどういうことかを把握する〉ことを含むだろう．すると，〈「地球は動く」を理解する〉ということは，〈地球が動くとはどういうことかを把握する〉ことと〈地球が動くことと「地球は動く」という文とを関連づける〉こと，という二つの要素に分解できる．すなわち，図式的にはこう言える：

〈文の理解〉
＝〈内容の把握〉＋〈文と内容との関連づけ〉.

しかし，このような分解にそもそも意味があるのかどうかは問われうる．実際，いわゆる「思想に対する言語の先行性（priority of language over thought）」（例えば Dummett 1993 を見よ）という考えに基づくならば，〈地球が動くとはどういうことかを把握する〉ということは，〈地球が動くという内容を表現する何らかの文を理解する〉ことに帰着する．だとすれば，上の分解は結局，次の分解と変わらないのではないか：

〈文 s の理解〉
＝〈文 s と同義なある文 s' の理解〉＋〈文 s と文 s' との関連づけ〉.

しかし〈文の理解〉というものは，少なくとも最終的には，〈その文と同義な文の理解〉に訴えることなく説明できなければならないのではないか．とりわけ，ある話者が母語のごく単純な文について持つ理解は，このような仕方では説明できないはずではないか．

以上の議論は，課題（i）の遂行が，次の二つの前提の下で課題（ii）の遂行を含意することを示している：

(a) 少なくとも何らかの文の理解は，その文と同義な文の理解を参照せずに説明することが可能でなければならない，
(b) 思想に対する言語の先行性.

文の理解について課題（i）を遂行しよう，すなわち〈文の理解についての説明〉を与えようとすると，この二つの前提の下で，〈文の表す内容の把握〉を説明項に用いてはならない，ということが帰結する．〈文の表す内容の把握〉を説明項として用いないような説明を与えねばならない，ということは，言い換えれば，〈文の表す内容の把握についての説明〉を与えねばならない，ということである．すなわち，文の意味内容について課

題（ii）を遂行しなければならない．

また，この議論は「意味理論はつつましくあってはならず，徹底したものでなければならない」という徹底性の要求の正当化にもなっている．すなわち，WTMI においてダメットは，まず「当の言語の語と概念とを関連づけ」，「必要な概念をすでに持っている人に当の言語の解釈を与える」という「限定された仕事のみを達成しようとする意味理論」として「つつましい意味理論」を定義する（WTMI, p. 5）．これを私の用語で言い直せば，〈文の理解についての説明〉の内，〈文が表す内容の把握についての説明〉を与えずに，〈文と内容との関連づけについての説明〉のみを行うのが「つつましい意味理論」であり，〈内容の把握についての説明〉まで含め，〈文の理解についての説明〉を完全に与えるのが「徹底した意味理論」なのである．

そしてダメットは，「概念の把握というものに対してわれわれが持つ最良のモデル——多くの場合，唯一のモデル——は，何らかの言語におけるある表現ないしある一連の表現を使いこなせるということによって与えられる」（WTMI, p. 6）と主張し，それゆえ「つつましい意味理論は，もしわれわれがそこから対象言語の理解を導けるのだというのなら，特定されていないとはいえ何らかの言語を使いこなせることを前提する」（ibid.）のであり，その点で「翻訳マニュアルより優れているところは何もない」（ibid., p. 20 ; ibid., pp. 6, 15 も参照），と言う．これをわれわれの用語で繰り返すと，思想に対する言語の先行性（前提（b））を認めるならば，つつましい意味理論は〈ある文の理解についての説明〉を〈それと同義な文の理解についての説明〉に帰着させることにしかならない，という意味で，翻訳マニュアルと変わらない，というわけである．

さらにダメットは，つつましい意味理論が翻訳マニュアルと変わらないということから，つつましい意味理論が「言語，例えばその人の母語に習熟するとはいかなることかを，他の言語の知識から独立に説明してはいない」（WTMI, p. 15），ないし「ある人が言語を知っているときに知っていることは一般的に言って何であるのかを説明できていない」（ibid., p. 20）ということ，すなわちつつましい意味理論が前提（a）に反していることを導いて，つつましい意味理論を退ける．従って，意味理論はつつましくあってはならず，徹底したものでなければならない，という論点は，結局のところ，「意味理解を持つとはどういうことかを特定する」という課題（i）の遂行が，前提（a）と前提（b）の下では「意味内容の把握が何に存するかを特定する」という課題（ii）を含む，と言っているのである．

4.2　デイヴィドソン批判

以上の議論はあまりに抽象的なので，少し具体例を見よう．

WTMI の主題は，一定の経験的制約を満たす真理理論は意味理論として使えるという，よく知られたデイヴィドソンのアイデアを批判することにあった．しかし，真理理論は「文 s が真であるのは p ときかつそのときに限る」という形の定理（T 文）を出力するものであり，この定理は文 s の理解については何も述べていないので，そのままでは意味理解についての説明になりようがない．それゆえ，意味理解についての説明を主題とする先ほどの議論は適用できないように見える．

しかし，真理理論から意味理解についての説明を取り出すための，何らかの操作を考えることはできるかもしれない．実際ダメットは，「文 s が真であるのは p ときかつそのときに限る」という T 文が与えられたとき，それに「と知っている」を付けることで，言及されている文 s の理解と同等なものが得られる，という考えについて述べ，この考えをデイヴィドソンに帰している．例えば，「文「La terra si muove」が真なのは地球が動くときかつそのときに限る」という T 文が与えられたとき，〈文「La terra si muove」の理解〉は，〈文「La terra si muove」が真なのは地球が動くときかつそのときに限ると知っていること〉と同一視できるのではないか（WTMI, p. 7 ; ibid., p. 3 も参照）．

しかし，〈文「La terra si muove」の理解〉を〈文「La terra si muove」が真なのは地球が動くときかつそのときに限ると知っていること〉として説明し，かつそれ以上の説明を付け加えないとしたら，つつましい意味理論しか得られない．これがダメットのデイヴィドソン批判の鍵となる論点である[*11]．

一般に，〈P という知識〉のような命題的態度は〈P という内容（命題）の把握〉を含む．そして，T 文は対象言語文の真理条件を表現する部分を含むので，〈T 文の表す内容の把握〉には〈その T 文が関わる対象言語文の真理条件の把握〉が含まれる．すなわち，〈文「La terra si muove」が真なのは地球が動くときかつそのときに限るという知識〉は，〈文「La terra si muove」が真なのは地球が動くときかつそのときに限るという内容の把握〉を含み，この後者はもちろん，〈地球は動くという内容の把握〉を含む．従って，今提案されている説明においては，〈文「La terra si muove」の理解〉が〈地球は動くという内容の把握〉，すなわち〈文「La terra si muove」の表す内容の把握〉を既知のものとして利用しつつ説明されていることになる．

すると，もしここで，〈地球は動くという内容の把握〉に対して何の説明も付け加えず，既知のものと考えるとすれば，これは先に述べた意味でつつましい意味理論となる．それゆえ，再び思想に対する言語の先行性（前提（b））を認めるならば，これは〈文「La terra si muove」の理解〉を〈地球は動くという内容を表す何らかの文の理解〉として説明しているに過ぎない，つまり翻訳マニュアルと変わらない．

そして，〈文「La terra si muove」の理解〉が，それと同義な文の理解に帰着させることなく説明できるはずだ（前提（a））とするならば，われわれは〈地球は動くという内容の把握〉を既知のものとして利用しないような〈文「La terra si muove」の理解〉についての説明を求めなければならない．より具体的に言えば，〈文「La terra si muove」が真なのは地球が動くときかつそのときに限るという知識〉を既知のものとして利用せずに，この知識を持つとはいかなることなのかを，命題的態度を使わずに説明することが必要となるだろう．§2 で挙げたタイプ（B）の説明が目指しているのは，まさにこのことに他ならない[*12]．

4.3 『たどりつくまで』との比較

では，以上の解釈は『たどりつくまで』のそれとどう異なるのか．徹底した意味理論は課題（i）も課題（ii）も遂行する，という点は私の解釈でも『たどりつくまで』の解釈でも変わらないが，これと対比されるべき「つつましい意味理論」に対する理解が私と『たどりつくまで』では異なっている．

私の解釈においては，課題（i）は「つつましい意味理論」と「徹底した意味理論」に共有された課題である．そして，「つつましい意味理論」は課題（ii）を遂行することなく課題（i）を遂行しようとする理論であり，「徹底した意味理論」は課題（ii）も含めて遂行しようとする理論である．しかし『たどりつくまで』においては，「つつましい意味理論」はそもそも課題（i）を共有しておらず，課題（i）も課題（ii）も遂行しないような理論とされている．それゆえ徹底性の要求の正当化は，あらゆる意味理論が課題（i）および課題（ii）を遂行しなければならないという論点の正当化だということになる．結果的に『たどりつくまで』は，課題（i），課題（ii），前提（a），前提（b）のすべてを一挙に正当化せねばならなくなり，話を難しくしているように思われる．

実際のところ，『たどりつくまで』はこの点において，WTMI の議論に戸惑ってきた人々と同じ誤解を引き

[*11] 以下の論述は WTMI, pp. 7–10 の議論を少々単純化したものである．ただし正確を期して言うと，この箇所の議論は直接的にはデイヴィドソンに対する批判になってはいないとダメットは言っており（WTMI, p. 11），デイヴィドソン批判を述べる論述は，ここでは触れていない論点を数多く含む，もっと複雑なものになっている．しかしその批判においても，私がここで取り上げた論点（ないしそれと類似の論点）が鍵となる．

[*12] これは結局，文の真理条件に関する知識という，ある特別な種類の命題的態度に関しては，思想に対する言語の先行性を破ることだと言える．しかし別の言い方をすれば，これは命題的態度一般の中で，文の意味の知識というものを特別視することであるとも言えるので，言わんとするところは思想に対する言語の先行性と変わらない．

ずっている．すなわち，デイヴィドソンの意味理論が翻訳マニュアルと変わらないというダメットの主張は，しばしば次のように理解されてきた．例えば「La terra si muove」という文の意味について説明するという文脈において，

「La terra si muove」が真なのは地球が動くときかつそのときに限る，

といった T 文を出力する真理理論と，

「La terra si muove」は「The earth moves」と同義である，

といった翻訳文を出力する翻訳マニュアルとの間に違いはない，という主張として．しかし，これは一見して奇妙な主張である．つまり，T 文と翻訳文はいずれも，「La terra si muove」という対象言語文と同義な文を含んでいるが，T 文における同義文「地球が動く」は使用されており，現実に成立したりしなかったりする事態を表現しているのに対し，翻訳文における同義文「The earth moves」は言及されているにすぎない．それゆえ，T 文は対象言語文と現実に成立したりしなかったりする事態との関係を述べていると言えるのに対し，翻訳文は文の間の関係を述べているに過ぎない．この違いこそ，T 文は意味についての説明として通用するが，翻訳文は通用しない，と言える理由だったはずだが，なぜダメットはこの違いを無視するのか，というわけである[*13]．

この解釈の誤りは，ダメットの主張が，例えば「La terra si muove」という文の意味についての説明として T 文と翻訳文を比較したものではなく，「La terra si muove」という文の理解についての説明として〈「La terra si muove」が真なのは地球が動くときかつそのときに限ると知っていること〉と〈「La terra si muove」は「The earth moves」と同義であると知っていること〉を比較したものだ，ということを見逃している点にある．つまり，ダメットが真理理論の意味理論への転用というデイヴィドソンのアイデアを翻訳マニュアルと比較したのは，意味理解についての説明を与える，すなわち課題（i）を遂行するという文脈においてであることが見逃されている．『たどりつくまで』はこの誤解を踏襲しているのである．

4.4　表出の要求

次に，課題（iii）が WTMI においてどのように導かれているか，そして課題（i, ii）とどう関連するかを見る．

WTMI では，前半で一旦デイヴィドソンの意味理論が翻訳マニュアルと変わらない，という結論が出された後に，この結論に対する全体論を用いた反論が考察されている．この考察を手短に見よう．すなわち，「真理理論の知識は全体として，対象言語を理解したり話したりする能力をもたらす」（WTMI, p. 15）のだから，当の対象言語のあらゆる文sについて〈文 s が真なのは p ときかつそのときに限る，という知識〉を持つことが，当の対象言語全体を理解したり話したりする能力として説明される，と考えればよい，というのがその反論である．こう考えれば，〈文 s が真なのは p ときかつそのときに限る，という知識〉を持つとはどういうことかを，各文sごとに説明する必要はないのである．

これに対してダメットは，この考えにおいては「言語全体を使う能力を，原理的にであれ，個々の語や文，あるタイプの文といったものの理解を表出するような部分的な能力へと切り分けるためのいかなる仕方も，与えられてはいない」（WTMI, pp. 16–7）と述べ，特に個々の文を使う能力というものが切り出せないことが

[*13] 例えば McDowell 1987, p. 98 を参照．ただし，マクダウェル自身はこのようにダメットを解釈しているわけではない．

もたらす困難について論じる（ibid., pp. 17–20）．そしてこの箇所の結論として，「次のことがわれわれに義務としてのしかかってくる．すなわち，われわれの説明が説明力を持つためには，［…］それらの命題の知識の表出をなすとみなされるものは何かをも特定せねばならない」（ibid., p. 21 ;『たどりつくまで』，p. 188 も参照），すなわち課題（iii）を遂行しなければならない，と言われている．

以上の議論の趣旨はつかみにくいが，よく見てみると，「〈言語を理解する〉とは，ある実践的能力を持つということだ」という前提（c と呼ぼう）と，全体論批判から，課題（iii）の遂行の必要性を導いていると言える．実際この推論は次のように再構成できる．

まず，〈言語を理解する〉ことは〈その言語の文を理解する〉ことを含むのだから，前提（c）の下で〈文の理解〉は，〈言語の理解〉と同一視される実践的能力の部分をなすような，ある実践的能力に対応づけられる．この実践的能力は，一般には，文ごとに異なるとは限らない．つまり，〈いくつかの文の理解〉の間に相互依存があって，それらの文が一挙に理解されねばならない場合には，〈それらの文の理解〉には同一の実践的能力が対応づけられよう．しかし，分子論が正しければ，文理解の相互依存関係は言語全体には広がらないので，少なくともごく限られた一連の文のみに対応づけられた実践的能力というものがあるはずだろう．そのような実践的能力は，それらの文の理解の表出と言ってよい．そしてそのような表出が存在する以上は，意味理論はそれらの文の理解の表出について説明を与えることが可能でなければならない，すなわち課題（iii）が遂行できなければならない．

こうしてみると，課題（iii）の遂行の必要性すなわち表出の要求は，課題（i）や課題（ii）に言及せずに正当化できることが分かる．しかし，関係がないわけではない．というのも，文の理解の表出を特定すること（課題（iii）の遂行）は，もちろん文の理解についての説明を与えること（課題（i）の遂行）になるので，§4.1 の議論により，課題（ii）の遂行を伴う．つまり，文の理解の表出を記述する際には，課題（ii）のために，その文の表すことを内容として含む命題的態度に訴えてはならない，という制約がかかる．そして，§2 で見たタイプ（B）の説明は，この制約を満足する．

4.5　まとめと課題

以上の議論から，次の四つの前提が浮かび上がる．

- 文の理解についての説明を与える意味理論が構成可能でなければならない，すなわち，文の理解に関して課題（i）を遂行する意味理論が構成可能でなければならない．
- 少なくともある文の理解は，その文と同義な文の理解に訴えずに説明することが可能でなければならない（前提（a））．
- 思考に対する言語の先行性．すなわち，ある内容の把握は，その内容を表現する文の理解に帰着する（前提（b））．
- 言語を理解するとは，ある実践的能力を持つということだ（前提（c））．

（なお，全体論批判が実は前提（a）から帰結することをすぐ後で述べる．）

これらはどうやって正当化すべきだろうか．このうち最初の，課題（i）を遂行せよという要求に関しては，異論の生じる余地はない．つまり，われわれは文を理解しているのだから，それについての説明はあってしかるべきだろう[*14]．

[*14] 「意味理論は理解の理論である」というダメットの主張は，1990 年代以降多くの批判にさらされてきたが，それらの批判者たちが述べているのは，（1）「文の意味はその真理条件である」という主張は，「文の意味理解はその真理条件の知識である」という主張

前提（a, b）もかなり穏健な主張だと思われるが，反対者がいないわけではない．前提（b）への反対者としては，意味の概念を意図の概念を用いて説明しようとしたグライスが挙げられよう．他方，ダメット自身は前提（a）への反対者を特に挙げておらず，あたかもこの前提（a）に異論の余地がないかのように言っているのだが，考えてみると，クワインやデイヴィドソンのような全体論者は前提（a）に対する反対者であると解釈できる．全体論とは，どの文の理解も，同じ言語の他の無際限に多くの文の理解に依存する，という考えである（pp. 99–100 を参照）．このとき，文 A の理解が文 B の理解に依存し，文 B の理解が文 A の理解に依存するのだから，文 A の理解について説明しようとすれば，文 A そのものの理解に言及せざるを得ず，それゆえ前提（a）に違反することになるのである．

前提（c）に関しては，具体的な反対者は思い浮かばない．つまり，少なくともある言語全体を知っていると言えるために，その言語を適切な状況において適切に使えること以外の規準を持ち出すべきだとする議論を私は知らない．しかしそうだとしても，なぜこの前提（c）が広く受け入れられているのか，という点は一考に値するし，その考察から前提（a, b）の正当化につながる洞察が得られるかもしれない．

ダメットの議論が最終的にどう正当化できるかを論じるのは他の機会に譲る他ない．しかしいずれにせよ，ここで浮かび上がった前提は，意味に関する通常の考察において当たり前に議論されるような論点であり，かつそれ自体としてかなり穏健な部類に属すように思われる．このような前提から導かれるものであるからこそ，改訂主義的結論は真剣な考慮に値するものになると私は考える．

結語

本稿の議論をまとめよう．表出の要求に対して，基礎づけ主義に基づかない正当化を与える，というのが『たどりつくまで』の課題であった（§1）．しかし，表出の要求・徹底性の要求に対する『たどりつくまで』の解釈（§2）は，「言語と世界の接続」や「表象システム内部での説明」といった概念の不明瞭さと特殊さから言って，改訂主義を支えるのに十分とは思えない（§3）．『たどりつくまで』が同一視した「意味理論の第二の局面」に含まれる課題を区別し，ダメットの論点を検討してゆけば，そのような特殊な概念に訴えなくとも，意味に関する通常の考察に基いて改訂主義を動機づけることができる（§4）．

従って『たどりつくまで』の中心的な議論は不十分であったことになる．しかしそれにも関わらず，『たどりつくまで』は最も根本的なところでは正しいと私は考える．すなわち，ダメットの二値原理批判の議論は，基礎づけ主義のような特殊な考えをダメットに帰すことなく，意味や意味理論に関するごく一般的な考えに基づくものとして理解可能であり，それゆえ二値原理批判の議論は真剣な考慮に値する，という方向性を提示した点である．本稿で私が示そうとしたのは，この方向性はもっと徹底できる，ということであった．

文献

Dummett, M. 1975. “What is a Theory of Meaning? (I)”. Reprinted in his *The Seas of Language*, 1–33. Oxford: Oxford University Press.

Dummett, M. 1976. “What is a Theory of Meaning? (II)”. Reprinted in his *The Seas of Language*, 34–93.

を伴わない（ゆえに表出論証は真理条件意味論を否定しない），という論点か，（2）文を使える人に共通の特徴としての文の理解などというものはない，という論点であると思われる．（1）は §1 の原理（*）に関わる問題であり，表出の要求そのものとは関係しないと思われる．（2）は個人方言の理解という概念を否定するものではなく，個人方言の理解という概念さえ否定されなければ，少なくとも表出の要求の妥当性には影響しないと思われる．

Oxford: Oxford University Press.

Dummett, M. 1981. *Frege: Philosophy of Language*. 2nd ed. Cambridge, Mass.: Harvard University Press

Dummett, M. 1993. *Origins of Analytical Philosophy*. Cambrige, Mass.: Harvard University Press. （邦訳：野本和幸ほか（訳）『分析哲学の起源』勁草書房（1998）.）

金子洋之．2006.『ダメットにたどりつくまで：反実在論とは何か』．勁草書房.

McDowell, J. 1981. "Anti-Realism and the Epistemology of Understanding". Reprinted in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, 314–43. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

McDowell, J. 1987. "In Defence of Modesty". Reprinted in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, 87–107. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Shieh, S. 1998. "On the Conceptual Foundations of Anti-Realism". *Synthese* 115, 33–70.